

郷土史探訪

研 修 部

本年度の市内史跡探訪（八月二十八日、観海寺・堀田地区）の際、資料として会長から提供された論を郷土史探訪として掲載し、史跡探訪の意義を深めたいと思います。

速見郡立石村のことども

後 藤 重 巳

別府市の観海寺・堀田一带は、近世期をとおして、速見郡立石村と呼ばれた。現在の「南立石」などの地名は、その立石村の遺称である。

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の戦いののち、細川忠興が、豊前八郡および豊後の国東・速見の二郡の領主に任じられ、細川領が成立したが、彼は甥の萩原三位兼従に、速見郡内の千石を分知し、ここに萩原氏の立石領が誕生した。兼従は、細川忠興の妹祢世と神道家の吉田左近衛佐との間に生まれた人物であり、忠興からの分知は、慶長末期のことと思われる。

元和八年（一六二二）の「立石村人畜御改之帳」によると、「萩原殿御知行、高五百六十石、（中略）男女一四七人」と見え、ており、「朱印高」は千石と見えるものの、元和時点で、既に、五百六十石に減っている。周知の如く、立石村の中には朝見川と東端を境川が流れており、その水害や、この付近は地滑り地帯であることから「山崩れ」などによって、耕地が流失・埋没して、減石になったものである。

万治三年（一六六〇）兼従が死去し、息子の三位員従に相続されたが、員従が、宝永七年（一七一〇）に死没すると収公され、幕府領（天領）になった。

菊池寛の小説「忠直卿行状記」で知られる松平忠直が、越前福井藩七五万石を徐封され、豊後に配流になったのが元和九年（一六二二）。慶安三年（一六五〇）に死去、その間「賄料」（生活費）として、大分・速見郡内に、五千石を与えられていたが、速見郡内は、北石垣村と亀川村の一五〇〇石であった。忠直の死去後、これらの「賄料」地も幕府に収公された。因みに、大分銘菓「一伯」は、忠直の号名に由来するものである。

さて、「立石村」の領域は、現在の乙原境から、観海寺・堀田に及ぶ地域であった。

平成三年三月、本学（研修部注、別府大学）史学科の近世史研究会の手で刊行された『速見郡立石村、細川越中守様御検地帳写 田方反別番付帳』（原本・史学科所蔵）は、この立石村内の田畑耕地の様態を、詳細に伝える貴重な史料である。

この「反別番付帳」によると、村内は、「大字」と考えられる次の「筋」と「通」から成っていた。

温水筋（ぬくみ筋）

はなつら筋

井手の内通

せいら本筋（瀬入本カ）

山田筋

内川湯の前筋

上ノ田つがの尾筋

乙原中間通

みどりの原筋（御堂）

堂園田筋

本村通

たい筋（田井あるいは台カ）

川くぼ井手通

堀田の前通

杉戸ばば筋（杉戸馬場カ）

板地通

「温水筋」以下、「筋」と付くもの一〇、「井手の内通」以下、「通」と付くもの六である。

これらの「筋」や「通」の中に、さらに「小字」が多く記載されている。

たとえば、「温水筋」には、山の口・冷水谷・山の神・冷水・温水・ひらだ・せとの本・いだ・ほきの下など九小字が見えている。また、「はなつら筋」には、堀田の口・つか畑・堀田だ・はなつら・梅の木田ぢごく谷・湯の向道より上・湯の向道の向谷などがあり、「温水筋」の大字名は「温水」、「はなつら筋」の名は「はなつら」の小字から名付けられていることが知られる。

「番付帳」は、大字内に散在する田畑耕地の一筆ごとに、地番を付したもので、これによって、大字内の田畑筆数を知ることができる。

大字ごとの耕地の総反別は、未記載であり、集計する必要があるが、各大字内の田畑屋敷筆数を、表で示すと次の如くなる。

大字名	筆数
温水筋	五一
はなつら筋	三二
井手の内通	一九
せいり本筋	二八
山田筋	一一
内川湯の前筋	四五
上の田つがの尾筋	四
乙原中間通	二四
みどうの原筋	二九
堂園田筋	五六
本村通	二二
たい筋	一一
川くぼ井手通	三六
堀田の前通	八七
杉戸ばば筋	四一
板地通	一三

井手の内通・山田筋・たい筋(台カ)などは、百筆を越す田畑から成っているが、このうち、たい筋を除く二大字は、各筆ごとの反別が微細であるため、必ずしも総反別が大きな

ことを意味しない。一方、たい筋は耕地の反別が大きく、立石村中では最も地利に恵まれた大字であったものと思われる。これらの大字名で、現在小字名として遺っているものに、温水・花ツラ・御堂原・堀田・湯の向・井手ノ内・本村・山田・板地・上の田・つかの尾・中間・内川などがある。現在の上の田・つかの尾は「番付帳」には「上の田つかの尾筋」とあり、中間は「番付帳」に記載される「乙原中間通」の中間を指すものと思われる。たい筋は現在の台であろう。

「地付帳」の記載中には、至る所に「古来川欠」・「古来崩れ入り」・「古来山崩れ」・「皆荒」などの注記が各所に見られ、先述の如く、地滑り多発地帯の耕地の景観をよく物語っている。

この資料は、まだ子細に分析を終えていないが、その作業の結果によつては、近世期の立石村の復元が可能になるう。

特に、村中の大字地名が、「筋」と「通」で統一されている点など、現地調査を通して、精査すれば、新しい発見が期待されるかもしれない。
(文学部教授)

以上、『国史纂集』から原文のまま転載しました。史跡探訪に参加されなかつた皆様にも観海寺・堀田地区の理解を深めていただきたいと思います。